



時代遅れの距離

■ 難波 利三

書斎には机を二つ内側へ向けて据えていて、真ん中の2メートルほどの空間に回転自在な椅子がある。

一方の机にはパソコン，もう一つにはワープロを置き，必要に応じてくるりと身体を回す。長文の場合はワープロのほうが僕には使い勝手が良いので，未だに手放せない。お陰で正味，二つの文明の利器に振り回されている状態にある。

十数年前に初めてワープロを使い出したとき，中に偉い博士が二，三人，詰め込まれているのではないかと素朴に感心した。平仮名を打ち込んで変換すれば，薔薇も憂鬱も，難しい漢字が一発で飛び出す。こんな利口な機械がこの世に存在するのかと驚いた。

十年ほど前にパソコンに出会ったときは，博士が束になって潜り込んでいるように思えた。機械類に弱い僕など想像もつかない，優秀な頭脳が凝縮されているのだろう。

パソコンで使う頻度が最も高いのはインターネットで，調べものの必要が生じた場合，まずはそこで検索する癖がついた。すると大量の情報が手に入るが，これらは素直に信じて良いものかどうか，不安を覚える。落とし穴に嵌らないよう，後で調べ直す労力は惜しめない。

同じ頃から携帯電話も持つようになったが，ケータイもパソコンも現在に至るまで，残念

■ 難波利三
直木賞作家

島根県大田市温泉津町出身。関西外国語短期大学中退後、プラスチック業界新聞に勤務中、病気に倒れ、療養のかたわら、執筆活動を行う。1984年「てんのじ村」で第91回直木賞受賞。主な著書「地虫」(ぢむし)、「イルティッシュ号の来た日」、「小説吉本興業」、「草暖簾」、「難波利三・石見小説集」など多数。2006年大阪芸術賞受賞。



ながら最少限度の使い方しかできない。ケータイは半年前、新しい機種に買い換えたから、メールも打てるしテレビやニュースも見られるようになった。ほかにも沢山の機能が備わっているものの、通話以外に僕が可能なのは危うい手つきでのメールなど、ごく限られている。それも滅多に使わない。

同年配の友人が最近、iPadを購入し、パニックになりそうな苦勞の挙句、どうにか使えるようになったと喜んでいる。知的遊戯の機能もあり、別世界が広がるようで楽しいらしい。負けてはいられないぞと、僕も焦りを覚える反面、悔しいけど自分には到底使いこなせないだろうと、諦めものぞく。

いや、最初から弱気にならず、一步踏み出す勇気が必要かも知れぬ。有難い機械文明の恩恵に、少しでも深くあやからなければ損ではないか。勿体ないではないか。

その前に、せめてケータイぐらいは自由に使えるようになりたいと、改めて操作ガイドを読み始めた。時代遅れは仕方ないとして、その距離を多少でも縮めたいと切望しながら。

